第1部　各地域における東日本大震災

A　田老地域

第6章　個人墓地と海嘯碑

神田より子

はじめに

田老地区は過去にも津波による大きな被害が出ており、『東日本大震災宮古市の記録（第1巻　津波史編）』（宮古市　2015年）に記された明治29年と昭和8年の記録を記した『明治29年地震報告』と『昭和8年3月3日三陸沖強震及び津波報告』ともに中央気象台）によれば、田老村は以下の通りである。

明治29年の「岩手県管内海嘯被害表」によれば田老村の被害は総人口3千747人、死亡2千655人、負傷277人、健在者815人、総戸数666戸、流失家屋130戸、半潰家屋未詳、存在家屋536戸となっている。また昭和8年の「岩手県下被害報告」にある被害は総人口4千983人、死亡584人、行方不明327人、負傷122人、総戸数835戸、流失500戸とある。

『田老町誌　津波編（田老町津波誌）』（田老町教育委員会　2005年）では以下の通りである。

明治29年6月15日の明治三陸大津波の規模はマグニチュード7・5、最大波高15メートル、罹災戸数は365戸、死者・不明者1千859人、一家全滅は130戸、罹災生存者は336人、漁船流失は540隻となる。昭和8年3月3日の昭和三陸大津波の規模は、マグニチュード8・5、最大波高10メートル、罹災戸数は505戸、死者・不明者911人、一家全滅は66戸、罹災生存者は1千828人、漁船流失は990隻となる。

そして今回の平成23年3月11日の東日本大震災の規模は、『田老　あの日、あの時　2011・3・11　東日本大震災』（NPO法人立ち上がるぞ！宮古市田老　2012）によれば、マグニチュード9・0、最大波高8・5メートル、罹災戸数は1千691戸、死者・不明者181人、漁船流失は840隻となる。（以上アンダーラインは筆者）

中央気象台と『田老町津波誌』（出典の明記はない）の記録では被害の数の違いが目に付くが、明治29年の三陸大津波では総人口3千747人中死亡は2千655人、昭和8年では総人口4千983人、死亡584人、行方不明327人に上り（以上中央気象台）、また一家全滅が130戸（明治29年）、66戸（昭和8年）という数になる（『田老町津波誌』）。罹災戸数や死者・不明者の数も甚大なことから、家の継承さえままならない状況だった事が窺える。

そのため常運寺には個別の墓地内に墓石や墓碑とは別に家の「海嘯碑」が建立されている例が多くみられ、1軒の家から多数の犠牲者が出たことが見て取れる。

こうしたことを踏まえて、この章では常運寺での海嘯物故者の慰霊供養の様子と個人墓地内での「海嘯供養塔」を手がかりに、本報告書に掲載することに同意してくださった方々の話も加えながら、田老における津波への対処の仕方、生き方を述べてゆくことにしたい。

写真1「平成二十三年三月十一日海嘯物故者諸々霊」の碑

1　常運寺と慰霊の行事

多くの方々が犠牲になった田老では、3月11日の震災当日と、8月の盆の期間には、供養のために親族や知人の皆様が集まり、墓参をしたり、法要に参列している。ここでは海嘯物故者の慰霊供養と、墓参の様子を述べてみたい。

2012年8月11日、常運寺の本堂前には「奉為平成大海嘯殉職者諸霊々」と書かれた卒塔婆が立つ。この日の18時に本堂にて住職によ

る読経があり、その後で副住職は「本日参列の善男善女に向かって、平成23年度の海嘯殉職者に向かって、世間を導いて、同じく覚路に登らんことを、乞い願うところは家門繁栄、子孫長久、災障消除、諸縁吉祥ならんことを」と回向文を読み上げ、物故者全員の俗名と戒名を読み上げる。その間に参列者は一人一人立って焼香をする。参加者全員による焼香の後、「おのおの海嘯物故者の菩提を弔い、涅槃の地にいて、あまねく世間を導き、浄土の峰に登らんことを…」等を述べて終了する。

夜になると18時45分から夢明かりイベントがあり、開会式には3分間の黙祷が捧げられた。この後、19時に田老から福島まで12か所で一斉に花火が打ち上げられる。これが「ライトアップ日本」のイベントになっており、この花火大会は19時30分にフィナーレとなるまで続けられた。

写真2　「夢灯り」のイベント　常運寺

常運寺さまから2012年8月13日に話を伺った。

檀家について

田老地区のほとんどの住民と、小堀内の開拓地の人々すべてが常運寺の檀家で、それ以外では宮古の真言宗長根寺が50軒、曹洞宗の善勝寺が30軒、摂待地区のほとんどと小堀内の元地区の一部が小本の宗得寺の檀家になる。約800戸が田老地区内の檀家で、200戸ほどが田老地区以外の県内や県外で、先日は取手や川口に葬式で行ってきた。

津波と葬儀

3月11日の津波が来てから、合同葬での葬式をやろうと思っていた。4月28日には四十九日の法要をここでやって、一人一人の死者の名前を読み上げたが、読んでも読んでも終わらなかった。そしてせっかく来たのだから、本堂で焼香をしてほしいと言ったが、大勢の参列者でなかなか終わらなかった。そこで百日目に当たる6月18日には百か日法要をアリーナでやった。

合同葬は無理かと思っていたが、ここで葬式をやりたいという人が出てきて、1日に2回午前と午後に毎日葬儀を行い、100件以上やった。

四十九日の法要では俗名を読みあげたが、行方不明の人の名前を死者として呼ぶのはおかしいので、その家に行き、遺族の人に確認を取り、名前を呼んで良いか聞いた。家族の人はわからないという。自分で判断できないのだ。合同葬儀の時も背中を押して、どうするか今結論を出せと迫った。他の寺では来るまで待つと言うが、私は行方不明者のいる全員の家に行って確認を取った。ある家では祖父は見つかったが、夫が見つからない。高3の女子、高2の男子、中2の男子の3人の子供がいて、中学生の男子が「お父さんは生きている」と言い張ったので、母親と話し合いをさせた。その結果、彼は「お父さんの葬式をあげてください」と言いに来た。この母は診療所の看護師長をやっている。この人は夫がいなくなっても一生懸命やっていた。娘は看護師にならないと言っていたが、母の仕事を見ていて、看護師になると言いだして看護大学に入った。彼女は父の日に私に「お父さんに」と言ってマグカップをプレゼントしてくれた。そんなこともあって彼女が大学に通う前に「飯でも食うか」と誘った。その時に汚い財布を出したので、コーチの横長の財布を買ってやった。そしたら彼女の母が「おまえには似合わない、私が使う」と言った。彼女の同級生のMは柔道80キロ級で岩手県2位になった。この子は君津の新日鉄に就職が決まったので、彼女にも財布を買ってあげたが、先日「伊勢海老でも食べて元気になって」と送ってくれた。今は地元に戻り、宮古で仕事をしている。

先ほど墓参りに来た娘さんは母と姉を震災で亡くした。母が見つかったとき、足がなかったが、後ほど見つかり、五体満足でお骨になった。

乙部のT・Iさんはずっと行方不明だったが、2週間ほど前に葬式を出してくださいと言ってきた。下着でも買って甕の中に入れなさいと言った。奥さんは何も入っていない甕に手を合わせていた。その1週間後に警察から電話があり、DNA鑑定で99パーセントの確率でTさんだという遺体が見つかった。また1月前に行方不明だったT・Kさんが大船渡で見つかり、DNA鑑定で本人と確認され、納骨した。

震災によって棚経は当分できない。石屋さんは家が流されて、ここの近くにおり、来てほしいと言われるが、彼の家だけ行って私の所には来ないと言われるので行けない。

僧侶は経を読むだけではなく、人と親しくつきあうのが仕事だと思う。坊さんは近寄りがたいと言われたくない。「ご自由にどうぞ来てください」、「オイ、コラ」の仲でいいと思う。僧衣を着るとちゃんと接してくれる。

盆の13日には栗の木と朴の木で施餓鬼棚を作る。昔は外に飾ったので、木陰を作るが、今は家の中に飾るので、本来はいらない。夕方になると「火をもらいに来た」という人がやってくる。

震災後、15、6日たってから、山の上に住んでいた人が灯油を取りに来て、自分の家で風呂を沸かしたのでどうぞといわれ、入りに行った。あまり気持ちがよかったので、これから「さん」付けでと呼ぶといった。本当は寒かったのですぐに湯船に入りたかったが、3回体を洗ってから入った。

復興ガールズという神奈川県の高校生が10数人でしばらく前に来てくれた。18日には20数人で来るという。

国際的な常運寺

ここは国際的で、10年くらい前から年に2回30人くらいのアメリカ人が来る。「禅を聞く会」というサークルをアメリカでやっている京都在住のS・バイメルという人が連れてくる。彼は20歳の頃ヒッチハイクでここに来て、泊まる所がないというので、私の父が泊めてあげた。その後20年ほど前に田老の総合事務所にFAXが届いた。「私はS・バイメルと申します。数十年前にお世話になりました。今はアメリカでツアー会社を立ち上げ、「禅を聞く会」を作り、京都に連れて行きました。ある寺に行くと住職が髪を七三に分けていて、これは禅ではないと思い、考えてここを思いついきました」という内容で、こうして彼らが来るようになった。そのツアー客の中にソーラー発電会社の社長がいて、震災後に何かやりたいと言ってきた。そこでお願いしたところ、5基のソーラーパネルを寄附してくれて、寺に1基、中学校に2基、グリーンピアに1基設置した。それを見た市長がもっとほしいというので、またお願いしたら15基届いたので、漁協に差し上げて、各浜に2基づつ取り付けてほしいとお願いした。

母校の奈良康明先生の家に下宿していた舞鶴市桂林寺の住職をしている能登春夫という同級生がいる。震災後しばらくして訪ねて来て支援をしてくれた。その後あちこちの寺からも支援が届いた。すべて彼が同級生たちに連絡をして手配してくれたものだった。

2012年8月14日朝9時

常運寺の墓地には多くの人々が墓参に訪れている。自分の家の墓地、親戚の家の墓地、三陸大海嘯碑を廻っている。

本堂内では本尊を安置した間の左側に「海嘯物故者諸々霊」「三界萬霊」など5つの霊墓碑が置かれた盆棚が作られ、5人の女性がその前で御詠歌を唱えている。

本堂で9時30分から行われる施餓鬼に参加した。施餓鬼会が始まり、般若心経、観音経などの経が唱えられ、「各家々の先祖累代の諸精霊」が読み上げられ、「盂蘭盆会の追善供養」について語られる。9時50分に施餓鬼終了後、再度御詠歌の詠唱がある。

墓地では多くの人々の墓参が見られた。元教育長の土井昌市氏の話によると、昭和8年の津波の後、元村長の関口松太郎氏が県に堤防を造るよう要請したが、断られた。そこで村民に声をかけて自分たちで立ち上がり、その後やっと県も動いて、堤防ができた。

小林学さん（昭和22年生、仮設住まい）は元社会教育課長で、田老

地区民生委員長、民生委員協議会長をしている。9月10日に大阪で大震災の体験発表を行う予定で、また10月24日には花巻の保護司の会でも発表の予定があるという。

2014年3月11日15時から常運寺にて海嘯物故者供養会が行われた。

住職による読経の後、参加者全員が焼香をしている最中、副住職が「おのおのの海嘯物故者の菩提を弔い、頓に無生を了して、速やかに仏果を證せんことを、……」と回向文を読み上げ、物故者全員の俗名と戒名が読み上げられる。

2　個人の墓地にある海嘯碑

写真３　常運寺墓地の個人墓地にある「海嘯碑」

常運寺の墓地には個人の墓地の敷地内に、明治29年と昭和8年に津波で被災した方々の慰霊のために個人で建立した海嘯碑がある。この海嘯碑と家にまつわる話を伺った。一家全滅あるいは幼子だけが残されるという事態に襲われた後、それでも家の継承を願った、田老の人々が取った行動の一端をここに記してみたい。

(1)　小林家

小林義一さん（昭和9年生、田老小林沢）に2014年8月8日に話を伺った。

小林家には4人の名前が刻まれた「海嘯碑」がある。

「海嘯碑　明治29年5月5日
藤右衛門　56歳（夫）
トシ　12歳（娘）
伊平　20歳（息子）
フミ　86歳（姑）」

明治29年の津波

小林家の屋号は「ハナヤ」で私は10代目になる。9代目がハナヤ藤右衛門だ。8代目小林藤右衛門の嫁セキ（昭和8年2月8日に89歳で没）は、明治29年の津波（当時44歳）で、唯一生き残った。それ以外の家族はすべて流された。そこで唯一生き残ったセキは、自分の末前の生家から小向シマを養女に迎え、シマは石垣半兵衛を婿として迎え、その子が藤右衛門を襲名した。

写真４　小林義一さん「自宅前で息子さんと」

昭和8年の津波

昭和8年3月3日（新暦、旧暦では2月8日）に再び津波に襲われた。籐右衛門は昭和7年に田代からヨシを嫁として迎え、翌8年に籍を入れ、翌昭和9年11月に私義一が生まれた。これは山田線の開通の年に当たる。この津波では、シマ、ヨシ、子供たちは山に逃げて助かり、籐右衛門と半兵衛は大工だったので、末前小学校の建築現場にいて無事だった。このときセキおばあさんが「命はテンデンコだから逃げろ、オレのことは良いから逃げろ」「地震があったら逃げろ、探しに来るな」と皆を逃がして、本人は津波で流された。ヨシさんたちは後ろの山に逃げて、ガーガーと音がしたが何も見えず、ヨシは大姑のセキに言われて逆らえず、ただ逃げた。身内の者を置いても逃げろというのは、血を残すと言うことだとわかった。明治29年の津波ではおじいさん、おばあさんを助けに行って亡くなった人が多かったので、その経験から出た言葉だと思う。

三鉄の前にあった石切場から堤防の石を切り取っていたが、その後地を半兵衛が買って宅地にした。

小林家の場合

自分の命を守るために、身内でも助けに行かずに自分が生き延びなくてはならないという教えがあった。「命はテンデンコだから逃げろ、オレのことは良いから逃げろ」「地震があったら逃げろ、探しに来るな」と皆を逃がして、本人は津波で流されてしまったという小林さんのご先祖のおばあさんの話があった。これはその前の明治29年の津波で、おじいさん、おばあさんを助けに行って亡くなった人が多かったという経験から出た言葉だという。そしてこの言葉は身内の血を残すことだという。それ故、小林家では明治29年の津波で唯一生き残ったセキさんは自分の生家からシマさんを養女に迎え、半兵衛さんを婿にして、その子が籐右衛門を襲名した。しかし昭和8年の津波ではこのセキさんもシマさんも流された。

(2) 田畑家

田畑マンさん、田畑ヨシさん、東キヌさんの話

田畑家の墓地には「海嘯死者之碑　明治29年旧5月5日」があり、この碑にはこの明治29年の津波で亡くなった田畑家の方々の名前が刻まれている。

「田畑家　津波墓碑

海嘯死者之碑　田畑末子松　66
佐惣　42
留之助妻エヘ　33
長男粂之助　12
次男佐四郎　7
長女　タカ　2
妹　ハツ　31

明治29年5月2日
徹芳普照信女　サワ　59歳　」

2013年8月8日に田畑マンさん（大正9年生）から伺った話と、2015年3月10日に末の妹の東キヌさん（昭和5年生）からの聞き書きを補完として加えた。

明治29年の津波と留之助のこと

マンさんとキヌさんの話によると、作がとれない頃、最後の男として生まれたのが祖父の留之助だった。明治の津波で裏玄関から逃げようとして流されたが、木材の下になったが生き伸びることができた。青野滝の本家ではこのときの津波で皆亡くなった。カカも子も亡くした。留之助はバッチ（末っ子）で分家に出ていたが、跡継ぎがいなくなり、実家に戻って後を継いだ。留之助夫婦には子がいなかった。摂待から嫁にもらったマツは留之助の2人目の妻で、子供ができず、イセを養女にした。留之助おじいさんは私（マンさん）が小さい頃、金貸しをしていた。また馬が好きで飼っていて、80歳くらいで亡くなった。

母のイセは田代の臼杵から養女に来て、樫内から来た与志松と一緒になった。イセの実家とは親戚ではない。留之助は馬が好きで、預けていた田代の中沢家に行ったら汚い女の子がいたので、もらってきて洗ったらきれいな子だったという。その子がイセでこの家の養女にして跡取りとなった。イセの弟が利三で、神子だった扇田シノの夫になった。イセの死後に後妻に来たのがサトで、この人は義理の母になる。

長男が佐惣（大正5年生）で留之助の孫に当たる。イセと与志松の長男で、何年もたって生まれた子だったので大切に育てられたが、病弱で若い頃に肋膜になり、入院のため仙台の大学病院に入ったが、20歳で亡くなった。碑にある佐惣は養子で、樫内から来た人の息子だという。おじいさんは津波で流れた話をよくしていた。「津波が来たら赤沼山に松を持って行き火を灯せ」と言っていた。自分のこの手を引いて逃げたという。

長男だった佐惣の嫁候補として伊茂野佐平次の家からソメという女の子を連れてきて働かせていた。この子が実家に戻っていたときに、その家の人たち10人くらいと一緒に津波で流されて亡くなった。そのためソメの妹のヨシを佐惣の嫁として連れてきたが、佐惣が早くに亡くなったため、嫁入り道具をすべて調えて嫁に出した。この家ではおじいさんと息子だけが残った。

昭和８年の津波

昭和８年の津波の際に、父が「沖から音がするぞ」と言ったので、津波とわかった。佐平次屋のおじいさんは井戸の水を見た所、水が引いていないので大丈夫だと言った。この時の地震は大きくなかったが、おじいさんが皆を起こして、赤沼山に逃げてたき火をした。このときは地震の後また家に帰って寝るという人がいたため、被害が大きくなった。昭和８年の津波の８年前には火事に遭った。家を建てて８年で家も流された。学校も焼けて、寺で勉強した。

田代から嫁に来た母は昭和８年の津波で足がぶらぶらになり、親戚が戸板を持って助けてくれたが、３日目に亡くなった。

平成23年の津波の時は役場の近くに家があり、お寺に逃げた。息子はふれあいセンターに勤めていた。孫たち３人は公民館に行くと言っていたが、誰かの車に乗せられて逃げた。今回の地震は初めての大きなものだった。

昭和８年の津波について（田畑ヨシさんの話）

田畑マンさんの妹の田畑ヨシさん（大正14年生）の話が『田老町誌津波編（田老町津波誌）』（田老町教育委員会　２００４）に掲載されている。

「昭和８年の津波の時、家族は８人であった。祖父留之助（76歳）、祖母マツ（63歳）、父由松（38歳）、母イセ（42歳）、兄佐惣（18歳）、姉マン（13歳）、ヨシ（８歳）、妹キヌ（３歳）。家は大八屋の裏の当たりにあった。

第１回の地震が落ち着いたので家に戻ったら、佐平次屋の伊茂野長蔵さんが来ていて、祖父と話をしていた。長蔵さんは「明治29年の津波の時には川の水も井戸の水もひけだったども、川の水もひけないから津波はこねえべー」といっていた。しかし祖母マツは短いたん靴を履いて、家の中を土足で歩きながら大切なものを探して「これは兄が持て、これは誰が持て」と指図していた。玄関にはみんなの分の草履を揃えた。父は非常時に備えて、松の根を割って松明りをこしらえ二丸まるって（結わえて）用意しておいた。私はブルブル震えていると、祖母が「寒がったら、これを着ろ」と大人の袖なしを着せてくれた。２度目の地震が揺った。祖父は「２度揺れすれば津波が来るもんだ」と言っていた。そうしたら間もなく沖の方から「ゴー」と音がした。

「そら津波だ。逃げろ」という声とともに飛び出した私たちは赤沼山へ逃げた。住宅の裏の方から母みたいな「助けてー」という声が聞こえてきた。父が降りてみると、母が崖っぷちにしがみついていた。「お前、そしたら津波にさらわれっぴゃー。早く上がって降りろ」と引っ張ったが歩けない。暗くてわからなかったが、足を挟まれ大けがをして歩けなかった。そこで父は「そんだら俺さ背負わされ」と言って母

を背負い立とうとしたら、腰を痛めて自分も歩けなくなった。「こうしていると津波にさらわれっから、などかして（何とかして）這って歩け」と言って、2人で必死になって這って大赤沼当たりまでたどり着いた。見ると母の足が皮だけでブラブラしていたので、応急手当をした。下の方から「ガーワラワラワラ」と大きな音（津波で家が壊れ、ぶつかり合う音か）が聞こえんの。そうしているうちに、あそこら（荒谷）に火事が起きた。「たすけてーたっっっすけてー」という声がかすかに聞こえた。おばあさんが「ここにも波が来るかもしれないから逃げっぴゃ」と言ったので、また山の上へと逃げた。赤沼山からお寺のうしろ山のウスギ山まで逃げた。

母はいったん避難したが、津波で避難すると食べるものがないと思い、また家に引き返し作ってあった餅を籠に詰め背負って逃げた。しかし崖っぷちで上がれず笹にしがみついていたら飛んできたトタン屋根が足に乗っかり、深く切れたらしい。その後に波が来てさらに足に食い込んだらしい。その後宮古の病院に行った母は、手当の甲斐もなく3日後に亡くなった。

津波の後始末は、兄佐惣1人の肩にのしかかった。重労働のためにすっかり身体を壊し、最後は肺結核で昭和12年に亡くなった。

おじいさんの話では、明治29年の津波の時、家で法事があり親戚の人がたくさん集まっていた。そこに津波が来て皆流され、おじいさん1人が助かった。5月5日の端午の節句にご法事はおかしいと調べてみたら、5月2日におじいさんの姉のサワが亡くなっていた。

昔は一番先に生まれた人が家を継いだ。祖父留之助の家は、長女に婿を取り家の跡をとっていたが、明治29年の津波で皆流れ、絶家になった。だから分家していたばっち（末の子）の留之助が実家に戻って後を継いだ。」

田畑家の場合

田畑家では「海嘯死者之碑　明治29年旧5月5日」の碑には津波で亡くなった7名の名前が刻まれている。この後、分家に出ていた留之助さんが田畑家で跡継ぎがいなくなったため、実家に戻って後を継いだ。留之助夫婦には子がいなかったため、親戚ではない田代の中沢家からイセさんを養女に迎え、樫内から来た与志松さんと一緒になった。

その長男の佐惣さんの嫁候補だった伊茂野佐平次家のソメさんは実家に戻っていたときに、その家族10人と一緒に津波で亡くなった。そのため妹のヨシさんを佐惣さんの嫁候補として連れてきたが、佐惣さんが早くに亡くなったため、嫁入り道具を調えて田畑家から嫁に出した。伊茂野家ではおじいさんと息子だけが残ったという。この津波は昭和8年のことと思われるが、亡くなったソメさんの名前はないが、ソメさんの生家の伊茂野佐平次家の墓誌には昭和8年の海嘯で亡くなった6名の名前がある。田畑マンさんの語りの中で、「佐平次屋の伊茂野長蔵さんが来ていて、祖父と話をしていた」という長蔵さんの名前が伊茂野家の墓誌に記された6名の中にあり、彼も助からなかったことがわかる。佐平次屋では明治29年の墓誌にも海嘯で亡くなった5人の名前がある。

(3) 木村家

木村金雄さんの話

2014年8月10日に木村金雄さん（昭和25年生、田老仮設）から話を伺った。

昭和8年の木村家の海嘯碑が常運寺の墓地にある。曾祖父寅次郎、祖父金太郎、祖母のはなと2人の子が亡くなり、残ったのは私の父東一と妹で叔母のチヨのみだったという。

「

右側面	木村寅次郎	70歳
	すぎ	65歳
正面	海嘯死者之碑	
左側面	金太郎	38歳
	はな	36歳
	栄次郎	7歳
	恭章	4歳

」

当時、長男だった金太郎の弟の仁太郎が鍬ヶ崎で教員をしており、そこで下宿をしていた旅館の娘の横坂トクと結婚した。木村家の跡継ぎがいなくなったため、仁太郎は鍬ヶ崎の旅館をやめて、田老に戻って旅館を始めた。横坂旅館と言い、中町の田中カリント店のそばだった。仁太郎は田老に戻ってからも教員をしており、私の父とその妹を育てた。

横坂家はかつて廻船問屋をやっていて、その先祖は東京から来たという。北前船の運営をやっていたが、時化で船が沈没してから経営が傾いて、鍬ヶ崎に移ってきた。横坂トク（コウコとも呼ばれていた）の母がまだ生きていて、この人はウメといい、田老のハツネさんと常運寺の念仏仲間だった。仁太郎は常運寺の先代の住職と仲が良かった。コウコおばあさんは東京ではフランス人形のような服を着て、その兄の亀吉がスーツを着て帽子をかぶった写真があった。たいそう羽振りが良かったという。コウコの妹のチヨは宮古に嫁に行った。その夫は銀行員で、盛岡に転勤になり、今は盛岡にいる。ウメさんはてきぱきしていて、都会人のようなしゃべり方だった。

私は幼稚園か小学校1年の頃、バイオリンを習っていた。中学校の体育館で姉と仁太郎の娘が踊り、私が歌を歌った記憶がある。小さい頃は自分が横坂なのか、木村なのかよくわからなかった。仁太郎の妻だった横坂トクが自分の母のようで、母が2人いた感じで、どちらが母かわからなかった。仁太郎は教師を辞めてから漁協に勤めていたが、私が小学校1年の時にがんで亡くなった。

私には曾祖父に当たる寅治郎の位牌は仁太郎が作らせたものだった。彼の顔は今も思い浮かべることができるが、祖父の金太郎と祖母ハナの写真はないし、顔も思い出せない。38歳と33歳の祖父と祖母というのは想像できない。仁太郎の写真も位牌もなかったが、その息子が水戸に行っており、写真が残っていた。中学校の入学式か卒業式のもので、私の父の東一と仁太郎が一緒に写っていたので、それを抜き出して位牌の代わりとした。コウコさんが私の母のサヨに話していたのをどこかで聞いていた。

仁太郎の子供はシュンイチ（84歳）、晋（故人）、ヒロシ（昭和16年生）、イサオ（昭和20年生）の男4人と、娘のフサコ（昭和24年生）の5人だった。

父の東一は半農半漁で、沖漁にも行った。兵隊に行き、鉄砲に当たってあごに貫通し、中国で白い服を着て入院した写真があった。中国で終戦を迎えたのだと思う。戻ってからは沖漁をやり、その後磯漁をやり、土地があったので百姓もしていた。

その後、父と仁太郎の意見が合わなくなり、分かれた。家は別々に離れていたが、5、6軒先で旅館をやっていた。分かれた後もご飯を食べに行ったりしていた。裏の細い道でつながっていた。そのうちに父も仲直りをして、また一緒になった。母が嫁に来た頃はまだ旅館をやっていて、一緒にやっていた。仲直りをしてから、母の妹のキョウコが横坂の長男に嫁いできた。母の実家は岩泉の中村だが、昭和8年の津波で家族はいなくなった。

私は「横坂さん」とか「木村さん」と呼ばれ、面倒くさいのでいつも「はい」と答えていた。昭和8年の海嘯碑は自分の親と家族のため、仁太郎が建てた。当時は蓮華紋が珍しかった。

横坂家の墓には仁太郎とトクと叔父の亀吉が入っている。横坂家の墓は常運寺に大きいものがいくつもある。

母のサヨ、横坂の母のコウコも震災の数年前に亡くなり、津波で流されずに済んだ。コウコさんは5、6年寝たきりだった。津波では犬も助かった。慰霊碑の右側に犬の位牌塔も作った。震災後ペットの墓も寺で作ったが、私は自分の墓地内に作った。

震災の翌年の平成24年に3か所あった墓を1か所に集めた。この度の津波では被災者は出なかったが、大変なのでまとめた。寺や役所に書類を出して、面倒だった。この津波で皆がバラバラになった。横坂家の娘は夫が亡くなったので、行きやすくなったのか水戸に行き、墓を守る人がいなくなった。横坂の兄弟は都会にいる。そのため、横坂家と木村家の墓は私の家で守ることになると思うが、掃除は私がやっている。家の墓地には墓が20基くらいある。被災前は中町に住んでいて、

私で7代目になる。

私はずっと田老にいる。震災まで田老漁協に勤めていて、41、2年間いた。仁太郎が教師を辞めてから漁協に入り、その次男の晋も漁協にいたので、私も入った。晋さんは宮古の全漁連にいたが、仁太郎さんに引っ張られて田老漁協に来た。私も漁協に入ったが、おじいさんを何と呼んで良いかわからなかった。晋さんを「ススマウンチャンコ」と呼んでいたので、黙っていた方が良いと思った。仁太郎さんを「とーさん」、その奥さんを「かーさん」と呼んでいた。父と母は「トーやん」「カーやん」と分けて呼んでいた。仁太郎は私が小学校1年の頃に亡くなった。

漁協では「二十日講」をやっていて、畠山功さんが大棒をやっていた頃、仁太郎はあんこ餅が大好きで、引っ張られてよく行った。真崎海岸の近くの小港に定置網があり、そばには番屋があり、漁師の節句には偉い人が呼ばれていった。このあたりには私が子供の頃は番屋だけだったが、その後真崎ロッジ、ビーチハウスなどの宿泊施設ができた。鮭も当時は50～60疋捕れると大漁だった。鮭はかつて神様に供えるような貴重な魚だった。節句には大きく切り、竹串に刺していろりで焼いて、神様に供えてから自分たちで食べた。「二十日講」は年に1回で、今も11月か12月頃にやっている。昔は関係者が番屋に呼ばれ、酒を届けて朝まで飲んでいたが、今はそんなにならない。前は当直当番があったので、ずっと飲めた。川留めをしていたので、鮭だけではなく、道具など貴重なものも多く保管してあったので、盗まれると大変だった。

震災の時は漁協の嘱託をしていた。宮古病院に入院中だったので、7階にいて、3本沖から太平洋に白い波が来るのが見えた。宮古湾から出ていった宮古丸が見えた。この船は無事だったが、他の船はだめだったようだ。

父は私が小さい頃は地震があると船で沖に出た。今は保険があるので出ないが、沖に出れば船は助かる。漁師の先輩の佐々木徳松さんが小さい船を持っていた。これでも1千800～2千万円はする。今田老にある船は2千万円以上する。保険は掛け金が高いが、田老漁協では勧めている。

漁協では横坂晋が中間クラスで、山本徳太郎が組合長だった頃、仁太郎は組合長の外部の仕事を代わりにやっていて、いつも宮古に行っていたので、たまに私も付いていった。蒸気機関車にも乗った。娘と私がいつも一緒だった。書類作りは仁太郎がやっていた。私が漁協に入った頃は徳太郎さんがまだ健在だった。20年後の昭和40年頃に鮭が豊漁で、ボーナスが20万円くらいになった。組合員でなくとも各家に鮭が10本くらい配られた。その後は捕りすぎで、鮭が鰯のような値段になった。放流した魚が戻ってくるようになったが、今はまだ不漁だ。水温の関係もある。魚市場にいた頃は、20年前から南の方の魚がたまに入ってくるので、入札のために図鑑で調べて黒板に書いた。トビウオや60㌢くらいの刀魚、色のきれいな魚があった。その代わり鮭が不良になった。鰯は周期があり、5年くらいで捕れたり捕れなかったりする。鮭もそれがあるが、昔に比べると捕れない。川の近くに入らず、沖を廻遊して冷たい海に戻る。定置網に入らない。水温が高いと岡に近づかない。川のそばに寄ってくる魚を定置網で捕る。田野畑、真崎、姉ヶ崎、大船渡ではどこも良いということがなく、どこかが良いとどこかが悪い。水温の関係がある。

木村家の場合

たった2人残った幼子の東一さんとその妹のチヨさんを育て、実家である木村家の跡を護るため、亡くなった長男金太郎さんの弟の横坂仁太郎さんは鍬ヶ崎の旅館をやめ、横坂家の一族を引き連れて、教員を続けながら田老で横坂旅館を始めた。ここでは横坂の名前を残しながら、実家である木村家の子供を育てるという道を選んだ。だから話者である金雄さんは「木村さん」とか「横坂さん」と呼ばれ、どちらにも「はい」と答えていたという。仁太郎さんは自分の親と家族のために昭和の海嘯碑を木村家の墓地内に建立した。

しかしこの度の津波では家族がバラバラになり、結局墓を護る役目は金雄さんが引き受けるようだ。

まとめにかえて―家の継承と津波―

前出の記録によれば、明治29年の三陸大津波では総人口３千７４７人中死亡は２千６５５人、昭和８年では総人口４千９８３人、死亡５８４人、行方不明３２７人に上る（中央気象台）。また一家全滅が１３０戸（明治29年）、66戸（昭和８年）という数である（田老津波誌）。罹災戸数や死者・不明者の数の多さだけではなく、家の継承さえままならない状況だった事が窺える。

常運寺には個人の墓地内に家の「海嘯碑」が建立され、一軒の家から多数の犠牲者が出たことが見て取れる。こうしたことを踏まえて、田老における津波への対処の仕方、生き方を見つめてみると、先ず自分の命は自分で護ることを伝えている。さらに家が途絶えた場合には、その家をつなげてゆくために、ありとあらゆる手段を使って、家の継承を図ってきたということが見えてくる。

しかし、「イエ」とか「家族」の形が大きく変化しているこの時代に、そして今後、東日本大震災がもたらした爪痕に対して、地域の方々はどのように対処してゆくのだろうか。それぞれの時代と共に家族のあり方、先祖を祀るという行為も変化してゆくことだろう。その行方も含めて、しっかりと見守ってゆきたい。

【引用文献】

宮古市教育委員会編『東日本大震災宮古市の記録（第１巻　津波史編）』宮古市　２０１５年
田老町教育委員会編『田老町誌　津波編（田老町津波誌）』田老町町役場　２００５年
ＮＰＯ法人立ち上がるぞ！宮古市田老編『田老　あの日、あの時　２０１１・３・11　東日本大震災』ＮＰＯ法人立ち上がるぞ！宮古市田老　２０１２年